

めけ器こしを持って、人の手より口にうつし、時節も有物かな、自由なる御情にあづかると、袖下より手
を、入る、も有、

〔諸國落首咄三〕是は頓作内儀の手柄

都錦の小路山伏山の町の點者、用事有りて大峰のすしの點者方へ行れければ、亭主立出で様々
の物語しける、折節夕飯時分になり、ごきや膳の音高く聞ゆれば、定めし夕飯がな振舞る、よと
心待して居けれども、中々熱き茶さへ飲さず、餘り憎しと思ひて、内儀方へ一首贈らる、
大峰のすしに始て來て見れば、ごきやせんきの音ばかりなり

内儀おかしく思ひて、取敢ず返歌、

ごきせんき其品々を聞からは山伏山の町の人かや

〔醒睡笑五〕人はそだち

一大和の傍に十市とて大名ありしが、世にをちぶれ、吉野のにしつこうにおはせし時、あたりの
者共をふるまはんと觸らる、やう、此いくくかに、誰々女中どもに、わたり候へとなり、山がつ
の寄あひ女中とは御器の事なるべし、窄人にてましませば、椀などもあるまじ、てんでもちて、
ゆけやといひつ、御器をわたしさまに、是は我等がはげ女中くと、申てさし出した、

二人靜に、にしつかうといふ正字を辨せず、色々に書たるあり、彼瀧の東に有村を、東川といひ、
西にある在所を、西川といひ、如此書也、

〔倭名類聚抄十六〕疊子 唐式云、飯椀羹椀疊子、各一字、楊氏漢語抄云、疊子、

〔箋注倭名類聚抄四〕按略、中、疊子又作牒子、法隆寺資財帳有牒子、大安寺資財帳有漆塗圓牒子、

俗又作牒子、碟子、今俗呼如茶都、即牒子之音轉、略中、疊子淺薄可重疊、故謂之疊子、牒、札也、又有片
薄義、且與疊同音、故或作牒子也、

牒子
豆